

「脳卒中地域連携パスに関わる ソーシャルワーカーの視点から」

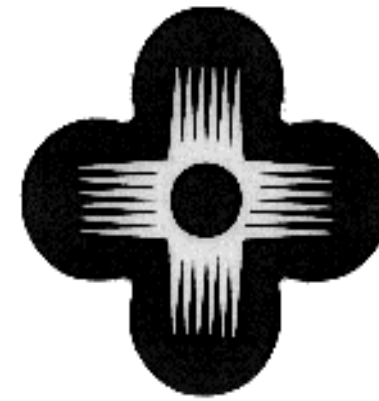
道南勤医協函館稜北病院
事務次長 医療福祉相談連携課長
青木達人(社会福祉士)

はじめに
道南勤医協函館稜北病院は、函館市の北西部にある一般病棟56床、回復期リハビリテーション病棟48床の病院です。他に内科クリニックより24時間の在宅支援診療所や訪問看護ステーション、ヘルパーステーションなどの機能を持っています。3名のSWで、他の医療機関からの転医の相談や退院に向けた患者様の支援をおこなっています。

地域連携パスとソーシャルワーカー
病院ごとのそれぞれの機能分化や病院ごとの平均在院日数の関係などから、急性期を担う病院と回復期リハビリ病棟、あるいは療養病床、老人保健施設、在宅などとの連携がより一層図られなくてはならない状況のもとで、患者さん御本人、ご家族の思いを受け止め適切な退院支援をすすめていくという大きな役割をソーシャルワーカーが果たすことが求められています。ソーシャルワーカーがおこなう退院支援は、院内の中で医師を始めとする、看護師、リハビリ技師などと連携をとり患者さんの置かれている病状はもとより、一人ひとりの患者さんの置かれている社会状況からどのような退院先が適切なのかを患者さん、ご家族とともに考えていくことにあります。こうしたソーシャルワーカーの退院支援の中で地域連携パスをどのようにすすめていくか。患者さんにより良い療養環境を検討していただく上でソーシャルワーカーがどのような役割を果たすのかが特に重要になります。すでに、当院では診療報酬で先に点数化されていた大腿骨頸部骨折の地域連携パスを2つの病院と運用しており、術後2週間程度で速やかに転医をしていただき、患者さんに不安なく引き続き療養をしていただくとともに、患者さんの家庭復帰などに必要な支援も引き続きソーシャルワーカーが窓口となることで引き続き迅速に支援が続けられるものと思われま

脳卒中連携パスの運用にあたって
函館でも、5月末の「道南脳卒中地域連携協議会」発足後、運用が開始され16施設が参加して、すでに100件を超える脳卒中連携パスが運用されています。当院でも、40件近い連携パスの運用をおこなっています。運用にあたっては、急性期、回復期を中心とした各職種ごとの運用委員会や世話人会などが中心となり意見交換をおこなっている。ソーシャルワーカーは其中で、急性期、回復期ともに、データ入力の確認、各職種が入力をおこなう患者情報の最終の確認など連携パスを運用する上でソーシャルワーカー関わり、果たす役割は非常に大きいものと思われる。実際のところ、このパスが運用され始めて、急性期、回復期側の双方でのソーシャルワーカーの情報交換は定期的におこなわれるようになってきている。その中で、単に治療の側面だけでなく疾病の発症により起こった社会的な問題を解決するために、ソーシャルワーカーが関わることが患者さんにとって安心を与えているものと思われる。パスの内容だけでは伝わらないものは、日常の電話など他の媒体を活用しながらよりよいパスの運用をしていく必要があると思われる。

今後の課題
現在のところパスの運用は、急性期、回復期の病院間での運用に限られている状況である。パスを運用した患者さんたちが、自宅、あるいは施設等に入所した場合など在宅を支えるケアマネジャーなどこのパスの運用を進めていくことが大きな課題だと思われる。パスは誰のものでもない患者さんのものであるという視点が大事であると思われる。また、連携する機関お互いが「顔が見える関係をつくる」この関係づくり連携、調整の要になるのがまさにソーシャルワーカーの役割であり、専門性ではないかと考えている。そうしてこそ、そこに住む地域の患者さんたちによりよい医療を提供できるものと思う。



ぱぶりけーしょん

事務局 北海道医療ソーシャルワーカー協会
札幌市中央区南4条西10丁目
北海道勤病センター内
<http://www.hmsw.info/>

脳卒中地域連携パスと MSWへの期待

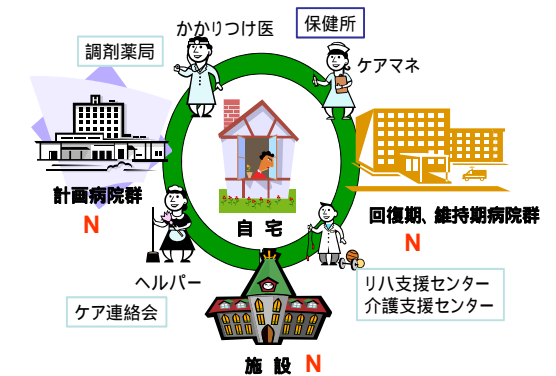
札幌市脳卒中地域連携パスネット協議会副代表
手稲溪仁会病院 脳神経外科部長 板本孝治

すでにご存じのことと思いますが、08年3月に札幌市脳卒中地域連携パスネット協議会が発足し、急性期から回復期および維持期施設など72施設が参加されています。使用するパスを手稲溪仁会病院にて開発した札幌型脳卒中地域連携パスに統一して運用するものです。この動きは札幌市とその近郊にとどまらず、道内各地に広がっています。同年3月に、日本脳神経外科学会北海道地方会幹事会にて、このパスを道内共通のパスとすることが確認されたこともパスネットの推進に拍車をかけております。函館～道南地域、帯広～十勝地域ではすでに札幌市同様の協議会が札幌型の地域連携パスを使用して活動しており、釧路～根釧地区や苫小牧～日高地区や室蘭～西胆振地区、名寄～道北地区でも一部で運用が開始され、旭川地区にても共通パスとして検討されております。

地域連携パスの意義や役割は今更申し上げるまでもありませんが、中でも札幌型パスの理念は最終的には図の如く急性期から回復期、維持期病院、慢性期介護施設、ケア施設、クリニック(かかりつけ医)、在宅医療介護まで含めて循環し、情報を共有することを目的としています。各地の医師会や保健所など公的機関も参加しての活動がそれを後押しすることとなります。このように多くの施設で多くの職種の方が関わり、なおか

つ脳卒中という多大な数の受療者が対象となるシステムは、これまでの医療界に経験のないものです。脳卒中の連携パスは、いわば壮大な実験場であるともいえます。

理想の循環型連携パス



このようなシステムの中で中心的な役割を担うのがMSWであると、私たちは考えています。急性期 回復期 維持期(在宅)の複雑なシステムを見通して、受療者に最も適切な治療からケアまでの流れを導き、安心して脳卒中再発の予防と後遺症の克服を目指す環境を提供していく役割であり、これは専門職としてのMSW以外にこなせるものではないと考えます。そのような重責を担うことは、確かに仕事量が増えることにつながるかもしれませんが、実際に、パスに inputs する項目は各職種の中でも多い方でしょうし、細かい内容でもあります。しかし、パスそのものの入力項目は決まっており、全道的な共通仕様であれば、仕事の効率性という意味でやりやすくなります。そして項目の多さは検証の自由を広げ、多大なデータがMSWの仕事の効果を実証する大きな助けとなるはずで、このようなMSWの仕事に関する数字データというのは、全国的にあまり出ていない画期的なものとなるでしょう。またパスの性質上、入院の早い段階から受療者 家族と接することができるのも、信頼関係を築いて行く上でメリットとなるはずで、

ひとつ問題があります。それはMSWの雇用数が、おそらく足りていないと思われることです。特に公立病院でのMSWの雇用が不十分という話を聞きます。例えば、手稲溪仁会病院では脳外科病棟担当MSWは2名おります。一方、札幌市立病院では病院全体でようやく最近？名採用となったと聞きます。北海道大学付属病院には、なんと病院雇用のMSWはほとんどおらず、リハビリ科や精神科などが医局持ちで？非常勤として採用していると聞きます。間違っていたらごめんなさい。これからの医療介護システム(現在でもそうなのですが)と受療者の橋渡しをするという重要な役割を担うべき専門職種が、まだまだ評価されていないと言わざるを得ません。

私たちは、地域連携パスとそのシステムが、MSWの皆さんへの期待とともに、その役割を正當に評価して社会へ知らしめる良い機会になるものと思っています。それにより、雇用環境が改善され、もっと多くの人がMSWという仕事を目指し、より多くの受療者に信頼と安心をもたらしていただければと願うものです。

中地域連携パス(以下、連携パス)の推進・作成・運用・検証を行い、連携パスの運用システムを確立し、地域の脳卒中診療ネットワークを構築することを目的とし設立された団体です。

運営にあたっては、医師や理学療法士とともに私を含め4名の当協会派遣MSWが世話人を担っています。MSWの世話人は、協議会を通じて脳卒中患者の良質な地域ケア実現のために効果的な連携づくりを模索しています。巷では、実際の地域連携パスの実働において様々な意見や課題があるようですが、パスネット協議会は、そういった意見や課題について検討できる仕組みになっております。以下、2008年9月29日にパスネット協議会の合同会議にて発表した内容を基に、ひとつの考え方としてお示したいと思います。

そもそも地域連携パスを必要とする背景には、厚生労働省の「疾病又は事業ごとの医療体制構築に係る指針」にもあるように、「医療計画制度の中で医療機能の分化・連携を推進することを通じて、地域において切れ目のない医療の提供を実現することにより、良質かつ適切な医療を効率的に提供する体制を構築し、国民の医療に対する安心、信頼の確保を図ること」があると考えます。最近よく耳にする「シームレス(切れ目のない)な連携」もここからきています。

また今年度、国は都道府県ごとに医療計画を立てさせました。その理由は、疾患別の平均在院日数の短縮に関する数値目標を設定し、医療費のコストが全国で一番低い県を基準に各都道府県を評価し、診療報酬単価に反映させようと計画しているからです。これは2012年で検証される予定になっており、医療費適正化に有効だったか各都道府県が評価されます。例えば医療費適正化について北海道が厳しい評価を受け、北海道の診療報酬が1点8円・9円という事態になれば、医療機関が次々倒れ、道民が安心して医療を受けられなくなる状況がでてくるかもしれません。だから、この地域連携パスを成功させることは北海道の医療を守っていくための、一つの方法だと思います。多少大袈裟かもしれませんが、それぐらいに考えておいたほうがよいのではないのでしょうか？

そこで、この地域連携パスを運用するに当たって、院内外に対しての連携の実働のキーマンに位置づけられているMSWは、どのような役割を担うべきかを考えると、そもそもMSWは「社会資源をつくる・開拓する」機能をもっており、この機能を発揮するよい機会が与えられておりそれを担うべきと考えます。9月の合同会議前に開催した急性期病院を対象のMSW部門会のなかで、参加した7医療機関の地域連携パスの運用総

件数は、約5ヶ月間で123件でした。その内訳は個別の運用件数は多く運用している機関と若干数運用している機関があることがわかり、その報告により医療機関ごとで運用件数の差が大きいことを、9月の合同会議にて報告しました。そこで今後のMSWの役割は、地域連携パスの運用状況を把握・分析し、この地域連携パスが道民にとって有効な社会資源となるよう成長させることであると、MSWの世話人内で共通認識をもちました。

また、パスネット協議会に参加している札幌市及び札幌市近郊の医療機関の数は、急性期・回復期・慢性期の医療機関合わせて72機関もあり、これをひとつの社会資源としてみた場合には、この社会資源が今後どのように機能していくべきかを検討・提案・実施まで積極的に関わるのもMSWのひとつの役割ではないかと思えます。札幌市は道内で一番大きな医療圏です。そこでこのパスネット協議会及び地域連携パスツールによる、よりよい連携体制システムの構築～確立にMSWが関わるということは、非常に大きな意味があり、また大きな役割を果たすことになると思えます。

MSWは日々のソーシャルワーク業務のなかで患者・家族の生活ニーズをキャッチしております。こうしたニーズを踏まえた効果的な地域連携システムを構築していくことで、道民の生活や医療を守ることに繋がっていきます。

今後のMSWとしての活動としては、「転院や将来の生活に際しての安心感」など患者・家族にとっての脳卒中連携パス活用の効果を明らかにすることなどに取り組み、道民が安心した暮らしを送ることができるようなシステム作りに取り組んでいきたいと思えます。

“ 「札幌市脳卒中地域連携パスとMSW」 ”

札幌市脳卒中地域連携パスネット協議会世話人
真栄病院 山口修史



札幌市脳卒中地域連携パスネット協議会(以下パスネット協議会)は、社団法人日本脳卒中協会北海道支部、社団法人札幌市医師会及び札幌市脳卒中救急医

療協議会と協力して、脳卒中診療に携わる急性期施設、回復期・維持期施設、並びにかかりつけ医間における患者管理やリハビリを円滑に継続するため、脳卒